

# 東邦大学学術リポジトリ



## OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	東邦大学理学部教職課程とらいふあっぷ 習志野との教育連携の実際 ～東邦大学見学ツアーの概要とその成果分析～
別タイトル	Actual Collaboration between Toho University and Lifeup Narashino
作成者（著者）	新保, 幸洋
公開者	東邦大学
発行日	2019.02.27
掲載情報	東邦大学教養紀要. 64(50). p.17-27.
資料種別	紀要論文
JaLCDOI	info:doi/10.14994/toho.liberal.arts.rev.50.17
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD89807272">https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD89807272</a>

# 東邦大学理学部教職課程とらいふあっぷ 習志野との教育連携の実際 ～東邦大学見学ツアーの概要とその成果分析～

新保 幸洋<sup>1</sup>

Actual Collaboration between Toho University and Lifeup Narashino

Yukihiro SHINPO<sup>1</sup>

## はじめに (問題意識)

最初に東邦大学理学部教職課程(以下、本学教職課程と略す)とらいふあっぷ習志野との関わりについて簡単に触れておきたい。本学教職課程では、子どもの貧困対策法(2014(平成26)年)施行以前の2012(平成24)年頃から、習志野市役所生活保護課(現生活相談課)より依頼を受け、生活困窮家庭の子どもたちへの学習支援を担う学生ボランティアの派遣斡旋を行ってきた。しかし、当初は貧困状態にある子どもたちへの支援に対して、それ程積極的だったわけではない。寧ろ関心は低かったというのが、本当のところである。

しかし、筆者自身が子どもの貧困問題に関する学習を重ねる中で、事態の深刻さに気付くようになると共に、2013(平成25)年頃からはこの問題に対する世間の認知度が上がり、関心を向ける人が増えてきた。そのような変化を受け、本学教職課程でも子どもの貧困問題に対して、本腰を入れて関わる必要性を感じるようになった。

2015(平成27)年4月1日からは習志野市における生活困窮家庭への直接的な支援の母体が、習志野市役所から事業委託された企業組合労協船橋事業団ワーカーズコープちばに変わった。その後上記組織から、らいふあっぷ習志野という名称の組織が新たに立ち上がり、生活困窮者の自立相談、住居確保、家計相談、学習支援などの各種事業を包括的に展開することになった。上述した学習支援事業については、受講生徒達自ら「フリー★スタディー習志野」という名称を付けて、活発な活動が行われている。その後学習支援事業では、らいふあっぷ習志野の他の事業とも連携しながら、貧困家庭の子どもたちへの積極的な支援が継続されている。本学教職課程では、事業の主体がらいふあっぷ習志野になって以降も、それまでのつながりを生かし、上記した学習支援事業に焦点化した形で引き続き関与してゆくことになった。具体的には、東邦大学としてこれまで同様、学習支援を担うボランティアの派遣斡旋に協力すると共に、今後はもう一步踏み込んだ関わりとして大学見学ツアーを実施し、教育連携を進めることに同意した。学習支援事業を実施するらいふあっぷ習志野側にとっては、円滑かつ継続的に事

<sup>1</sup> 東邦大学理学部教養科教育学教室・教員養成課程

業を行うためには、優秀なボランティア学生の確保が必須である。東邦大学から継続的に学生ボランティア講師を斡旋してもらえる関係を構築できたメリットは非常に大きいといえよう。

一方、学生を送り出す側である東邦大学教職課程にとってもメリットがある。子どもの貧困問題は、正確に理解することがなかなか難しい問題の一つである。そのような問題に対して、学生達がボランティア講師という形ではあっても、生活困窮状態にある子ども達と直接関わる機会を得ることが出来るのは大きな魅力である。なぜなら、子どもの貧困問題について、予断も偏見も持たず、直接当事者と接し、正確に実態を理解することが、問題解決の近道となるからである。厚生労働省（2015）によれば、子どもの7人に1人が相対的な貧困状態にあるといわれる現在、ボランティア学生達がらいふあっぷ習志野で得た様々な経験は、彼らが教師となって生徒指導や学級経営を行う際に、非常に役立つものとなろう。なお、2018年10月末現在における本学教職課程とらいふあっぷ習志野とのカリキュラム面（貧困問題に関連した授業科目のみを選択的に抽出した）を中心とした協力関係を図1に示す。また、その枠組みのもとで行われている学生ボランティアの活動状況の実態について示したものが図2-1～図2-4である。特に図2-2から、東邦大学出身のボランティア学生講師が非常に多いことが分かる。

一方、らいふあっぷ習志野のスタートと共に始まった大学見学ツアーは、2015（平成27）年より毎年1回の割合で開催され、今日に至っている。この試みは、子ども達に大学という場を知ってもらうと同時に、普段の家庭や学校の場では出来ない多様な体験を学内でしてもらい、生活経験全般の幅を広げることを目的に行っている。2015（平成27）年の開始当初は11月に実施したが、その後は8月末に実施する形で定着してきている。

概ね午前中は本学習志野キャンパス内の各学部の実験室見学、午後からは科学実験への参加やスポーツアリーナでのスポーツ体験などを実施してきた。その実施概要を表1に示す。

子どもの貧困問題に取り組んでいる民間団体が、博物館などの社会教育機関の見学に訪れるという企画は時折耳にすることがある。しかし、大学の研究室見学や、その他のキャンパス内の教育施設（実験室、スポーツ施設など）を利用し、ほぼ一日を過ごすという体験プログラムは、極めてユニークなものであり、全国的にも珍しいといえる。そのような体験を通して、子ども

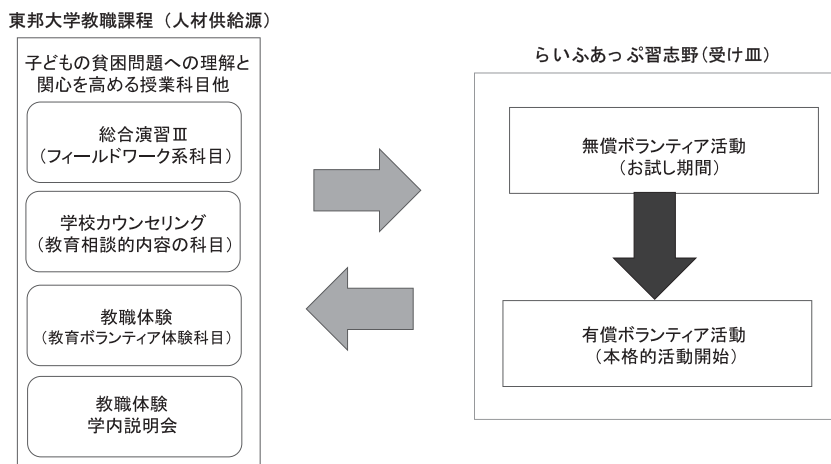


図1 東邦大学教職課程とらいふあっぷ習志野とのカリキュラム上の関係

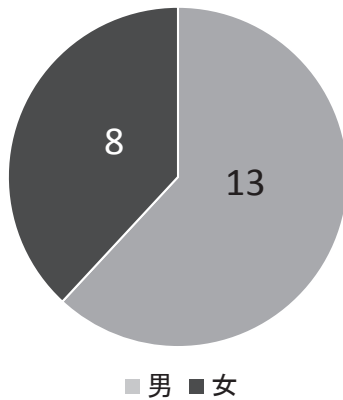


図 2-1 学生講師の男女別割合

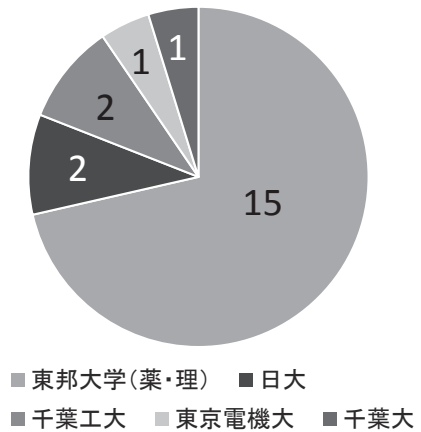


図 2-2 学生講師の出身大学

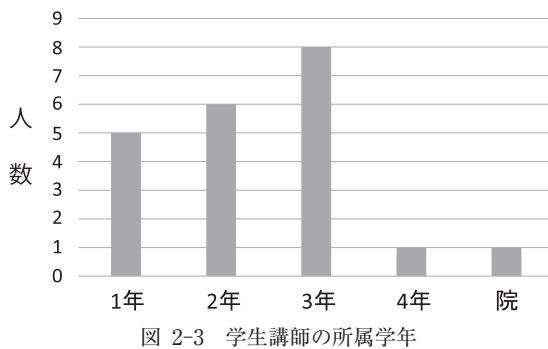


図 2-3 学生講師の所属学年

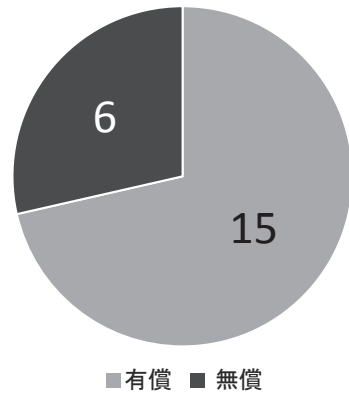


図 2-4 有償ボランティアと無償ボランティアの人数割合

図 2 らいふあっぷ習志野（フリー★スタディー習志野）におけるボランティア学生講師の実態（数字は全て実人数を指す）

達が何を考え、感じたのか、そして本当に彼らの経験の幅を広げることに貢献したのか否か等、興味は尽きない。そこで、本稿においては、この4年間（実質的には3年間）に渡る大学見学ツアーに焦点を絞り、参加した生徒たちが書いた感想文の記述内容の分析と評価を行うことにした。それにより、大学見学ツアーに参加した子ども達の体験の質を調べるとともに、今後のらいふあっぷ習志野との教育連携の在り方を検討する材料を得たいと考えたためでもある。

### 研究の目的

本研究の目的は以下に記す2点である。

(1) 2015年～2018年に行われた東邦大学の見学ツアーに参加した生徒たちが、体験終了後に記入した感想文を分析することにより、彼らの学びの具体的内容、特徴を明らかにし、それらの特徴を表すカテゴリーを抽出する。

表 1 東邦大学見学ツアー 2015年～2018年までの実施概要

実施年	2015年		2016年		2017年		2018年	
	実施日	時間帯	実施日	時間帯	実施日	時間帯	実施日	時間帯
実施場所	東邦大学習志野キャンパス	東邦大学習志野キャンパス	東邦大学習志野キャンパス	東邦大学習志野キャンパス	東邦大学習志野キャンパス	東邦大学習志野キャンパス	東邦大学習志野キャンパス	東邦大学習志野キャンパス
実施内容① (研究室他見学)	学内(学生食堂を利用)での夕食後、全体ガイダンス(理学部V号館2階の教室)。その後化学科の2つの研究室(石井研、佐々木研)を見学した。	全体ガイダンス後、理学部の3つの研究室(化学科：佐々木研、生命圏環境科学科：尾関研、物理学科：西尾研)を見学した。	全体ガイダンス後、理学部の2つの研究室(化学科：菅井研、山口研)の見学と習志野メデアセンターの計3ヶ所を全て見学した。	全体ガイダンス後、理学部の2つの研究室(化学科：菅井研、山口研)の見学と習志野メデアセンターの計3ヶ所を全て見学した。	全体ガイダンス後、理学部の2つの研究室(化学科：菅井研、山口研)の見学と習志野メデアセンターの計3ヶ所を全て見学した。	全体ガイダンス後、理学部の2つの研究室(化学科：菅井研、山口研)の見学と習志野メデアセンターの計3ヶ所を全て見学した。	全体ガイダンス後、理学部の2つの研究室(化学科：菅井研、山口研)の見学と習志野メデアセンターの計3ヶ所を全て見学した。	全体ガイダンス後、理学部の2つの研究室(化学科：菅井研、山口研)の見学と習志野メデアセンターの計3ヶ所を全て見学した。
実施内容② (体験活動：実験、運動など)	理学部V号館3階にて化学に関する体験実験(担当学生2名)を実施。その後感想表を記入して、現地解散	夕食後、スポーツアリーナ(いわゆる体育館)で、ボルダリング(壁登り)を体験した。その後、バドミントンなどにも体験終了後、ラウンジに移動して、感想表に記入後解散。	夕食後、スポーツアリーナ(いわゆる体育館)で、ボルダリング(壁登り)を体験した。その後、バドミントンなどにも体験終了後、ラウンジに移動して、感想表に記入後解散。	夕食後、スポーツアリーナ(いわゆる体育館)で、ボルダリング(壁登り)を体験した。その後、バドミントンなどにも体験終了後、ラウンジに移動して、感想表に記入後解散。	夕食後、スポーツアリーナ(いわゆる体育館)で、ボルダリング(壁登り)を体験した。その後、バドミントンなどにも体験終了後、ラウンジに移動して、感想表に記入後解散。	夕食後、スポーツアリーナ(いわゆる体育館)で、ボルダリング(壁登り)を体験した。その後、バドミントンなどにも体験終了後、ラウンジに移動して、感想表に記入後解散。	夕食後、スポーツアリーナ(いわゆる体育館)で、ボルダリング(壁登り)を体験した。その後、バドミントンなどにも体験終了後、ラウンジに移動して、感想表に記入後解散。	夕食後、スポーツアリーナ(いわゆる体育館)で、ボルダリング(壁登り)を体験した。その後、バドミントンなどにも体験終了後、ラウンジに移動して、感想表に記入後解散。
各年度毎に実施したプログラムの特徴	初の試みとして大学見学ツアーを実施。学食の利用、研究室見学、(化学の)体験実験。	午前、午後の2部制で実施。午前中は理学部内の3学科の協力を得て実施。午後は、ボルダリングという中学・高校ではほとんど体験しない種目を経験した。	午前、午後の2部制で実施。午前中は理学部内の3学科の協力を得て実施。午後は、ボルダリングという中学・高校ではほとんど体験しない種目を経験した。	午前、午後の2部制で実施。午前中は理学部内の3学科の協力を得て実施。午後は、ボルダリングという中学・高校ではほとんど体験しない種目を経験した。	午前、午後の2部制で実施。午前中は理学部内の3学科の協力を得て実施。午後は、ボルダリングという中学・高校ではほとんど体験しない種目を経験した。	午前、午後の2部制で実施。午前中は理学部内の3学科の協力を得て実施。午後は、ボルダリングという中学・高校ではほとんど体験しない種目を経験した。	午前中のプログラムで初めて健康科学部校舎内の設備等の見学を行った。午後は、スポーツアリーナで複数種目の体験を行った。	
参加生徒数(総数)	18	12	24	9	24	9	9	
内訳：中学生	18	10	21	6	21	6	6	
内訳：高校生	0	2	3	3	3	3	3	

(2) (1) で抽出したカテゴリーが、大学見学ツアーの企画趣旨・ねらいと合致するものになっているか否かについて検討し、今後の教育連携の在り方を考えるための材料を得る。

### 研究のデザイン

本研究の全体デザインを図3に示した。

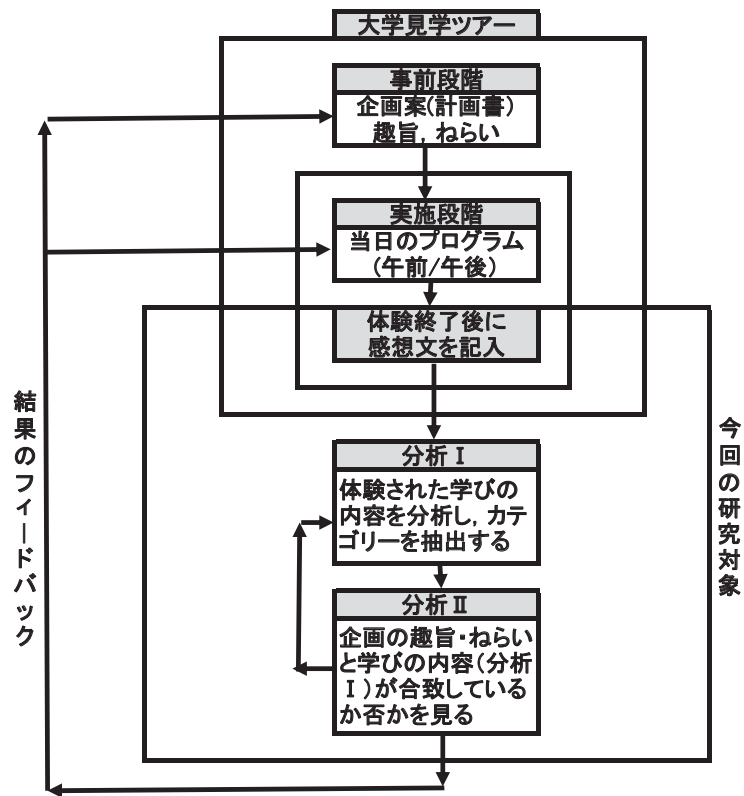


図3 本研究の全体デザイン

### 研究の対象, 時期

研究の対象は、2015（平成27）年～2018（平成30）年に行われた東邦大学習志野キャンパス見学ツアーに参加した中学1年生から高校2年生までの参加生徒（全員がフリー★スタディー習志野を利用）が体験終了後に記入した感想文である。ただし、データの保管ミスにより、2016年のデータのみが欠落した状態になっているため、今回の分析の対象からは外した。その結果、2015（平成27）年、2017（平成29）年、2018（平成30）年の3年間分49名分の感想文（記述データ）が分析対象となった。

なお、年度毎の校種別人数、男女別人数、参加者総数などのデータについては、図4-1～図4-4を参照して欲しい。

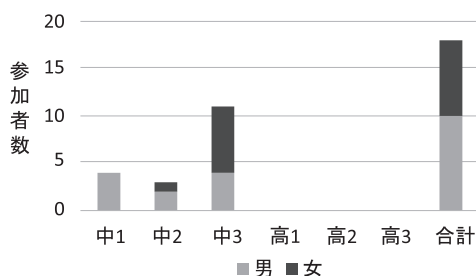


図 4-1 2015年参加者内訳

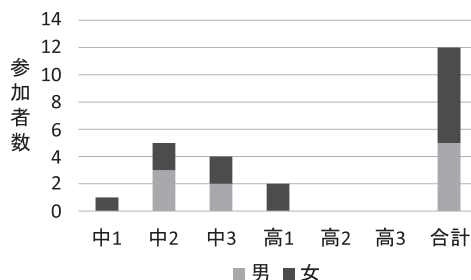


図 4-2 2016年参加者内訳

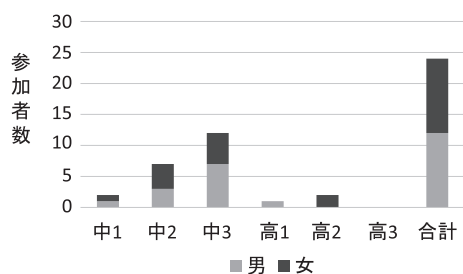


図 4-3 2017年参加者内訳

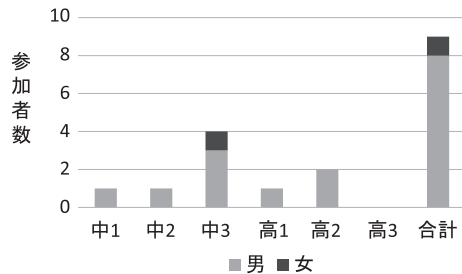


図 4-4 2018年参加者内訳

図 4 東邦大学見学ツアー参加者の年度毎の内訳

## 研究の方法

本研究は分析Ⅰと分析Ⅱに分けて行った。

(1) 分析Ⅰでは、参加生徒が書いた感想文を全て読み込み、各文章を意味ある文節ごとに細かく分けした。次にそれらの文章を全て集め、共通した意味を持つ文章が同じグループになるように分類し直した。そのようにして形成した個々のグループの記述内容を再度読み込み、そこから各グループの記述内容全体を表象するネーミングを行い、カテゴリーを抽出した。このカテゴリーが、大学見学ツアーに参加した受講生徒の学びの特徴を表すものとした。なお、上記の記述内容の分析（文節化）、類似した内容のグルーピング、個々のグループへのネーミングの作業は、筆者1人のみで行った。

(2) 分析Ⅱにおいては、分析Ⅰで作成したカテゴリー表と、大学見学ツアーの企画書に記載された趣旨やねらいを突き合わせ、当初のねらいどおりの学びが生徒たちの中に生じたのかどうかを検証した。より具体的には、企画書に記載されたねらいを分節化してリストアップし、分類番号を付けて整理した。次に、分析Ⅰで抽出したカテゴリーと一致すれば、趣旨やねらいが達成出来たと理解し、不一致あるいは該当なしであれば、未達成であると見なした。なお、今回の研究においては、大学見学ツアー開催の趣旨やねらいと一致するカテゴリーがあったかどうかのみを問題とし、当該カテゴリーが全体の中で何%占めたのか等の量的な分析は行わなかった。分析Ⅱの作業も、筆者が1人のみで行った。

表 2-1 感想文から抽出されたカテゴリーと記述の具体例 (部分)

分類記号	抽出されたカテゴリーの名称	記述の具体例
A	大学に対するイメージの変化	① 大学での活動に現実感が出てきた。イメージが持てるようになった。
		② 大学の皆さんにかたくおたたくイメージを持っていますが、大学生がフレンドリーで楽しく実験に取り組む姿を見て、自分の中の (大学についての) イメージが変わりました。
		③ 大学がただ勉強することではなく、自分の好きな分野で様々な人達と協力して実験している姿がとても良かった。
B	大学という教育機関の具体的内容等を知る	① 大学の実験室がどんなところか、何を勉強するのがよく分かった。
		② 高校とはまた別で専門的なことが学べる場だと思った。
		③ 人形を使って授業したりなど現実的だと思った。
C	普段の生活では知らないことを知る (知識の拡大)	① 普段見られない実験室を見て、中学理科とは違ってとても興味を持った。
		② 乗学部に行って漢方のことについて新しいことを沢山知りました。
		③ 医療や地学など学校ではやらないことなどを見学できて楽しかった。
D	見学・体験内容への興味が増したり、満足感を得る	① 楽しかったけど、興味を持って満足。
		② 理科の実験を見たり、考えたりすることが出来て楽しかった。
		③ マウスを使った実験をしていて驚いた。
E	夏期講習特別企画 (大学見学ツアー) に対する満足感・期待感を持つ	① 実験もやってみたい。
		② もうちょっと難しい事をやってみたい。中学でも同じことを教わった。
		③ 大学見学ツアーは3回目だが、いつも来るのが楽しみ。
F	日々の学習に対する意欲の高まりを感じる	① ちゃんと目標を定められるように日々、努力できるよるよう気持ちを切り替えたい。
		② 今の勉強を頑張りたい。
		③ これからもプリスタで頑張りたい。
G	大学への進学意欲の高まりを感じる	① 自分はまだ大学に入ろうとは思っていませんでしたが、今日のことを通して大学に入ってみたいなあと思いました。
		② スタッフが紹介してくれたような作ったりすることが好きなので、そういうのがある大学に行きたいなあと思った。
		③ 自分も大学に入りたいと思った。
H	進路選択の材料が増した	① どの大学に行きたいかとか決まっていけないので、今回の体験が出来てよかった。
		② 将来やりたい事が決まっていけないから、選択肢が増えてよかった。
I	身の回りの生活への関心が高まった	① 自分達の使っている物質はすごい。
		② これからの科学の進歩が楽しみです。



表 2-2 感想文から抽出されたカテゴリー（分析 I）と年度毎の該当状況

分類記号	抽出されたカテゴリーの名称	抽出されたカテゴリーの該当状況（年度毎）		
		2015年	2017年	2018年
A	大学に対するイメージの変化	○	○	
B	大学という教育機関の具体的内容等を知る	○	○	○
C	普段の生活では知らないことを知る (知識の拡大)	○	○	○
D	見学・体験内容への興味が増したり、 満足感を得る	○	○	○
E	夏期講習特別企画（大学見学ツアー） に対する満足感・期待感を持つ	○	○	
F	日々の学習に対する意欲の高まりを感じる		○	
G	大学への進学意欲の高まりを感じる	○	○	○
H	進路選択の材料が増した		○	
I	身の回りの生活への関心が高まった	○	○	

## 分析結果

### (1) 分析 I の結果

2015年の場合、参加者18名中17名が回答し、回答数は26件であった。抽出したカテゴリーは7個であった。

2017年の場合、参加者24名中23名が回答し、回答数は74件であった。抽出したカテゴリーは9個であった。

2018年の場合、参加者9名中9名が回答し、回答数は19件であった。抽出したカテゴリーは4個であった。

上記の結果から、全合計9個のカテゴリーを抽出することが出来た。

なお、抽出されたカテゴリーの分類記号と名称およびその記述の具体例（部分）を表2-1、に示した。また各実施年毎の各カテゴリーの該当状況を示したものを表2-2に示す。

### (2) 分析 II の結果

最初にらいふあっぷ習志野（フリー★スタディー習志野）の企画担当者が作成した企画書に記載されたねらい（企画実施で見込まれる成果）を記述したものを表3に示す。次に、分析 I で抽出したカテゴリーとのマッチング表を表3-1～表3-4に示す。その内、表3-1～表3-3は2015年、2017年、2018年の各年度毎でのねらいとのマッチング状態を示す。表3-4は、上記した3年間の結果全てを反映させたものである。その結果、カテゴリー分類番号J-2の「（フリー★スタディーの）講師が（大学で）努力していることを理解する（括弧内は筆者が追記した）」というねらいのみ、抽出されたカテゴリーと一致しないことが判明した。

それを結果通り解釈すれば、生徒たちには、学生講師陣の大学での日常的な努力は理解できていないことを示す。それ以外のねらいについては、年度毎に違いはあるものの、抽出されたカテゴリーとほぼ一致しており、企画の趣旨・ねらいはある程度達成されたと見なしてよいだろう。

表 3 企画書から抽出されたカテゴリー（分析Ⅱ）

分類記号	企画実施で見込まれる成果（趣旨とねらい）
J-1	勉強を教えてくれる大学生講師がどなたと ろでどんな勉強をしているのかを知る
J-2	講師が努力していることを知る
J-3	身近な講師の存在を将来のロールモデルと して、自分の将来像をイメージする
K-1	高校卒業後、進学という進路選択をするき っかけを与えることができる
L-1	現在の自分との比較をすることで、高校進学 に向けた学習意欲の向上を図る

表 3-1 感想文から抽出されたカテゴリーと企画実施で見込まれる成果とのマッチング（2015年）

分類記号	抽出したカテゴリーの名称	企画実施で見込まれる成果：趣旨とねらい（2015年）				
		J-1	J-2	J-3	K-1	L-1
A	大学に対するイメージの変化	○				
B	大学という教育機関の具体的内容等を知る	○				
C	普段の生活では知らないことを知る （知識の拡大）	○				
D	見学・体験内容への興味が増したり、 満足感を得る	○				
E	夏期講習特別企画（大学見学ツアー） に対する満足感・期待感を持つ	○				
F	日々の学習に対する意欲の高まりを感じる					
G	大学への進学意欲の高まりを感じる			○	○	
H	進路選択の材料が増した					
I	身の回りの生活への関心が高まった					

表 3-2 感想文から抽出されたカテゴリーと企画実施で見込まれる成果とのマッチング（2017年）

分類記号	抽出したカテゴリーの名称	企画実施で見込まれる成果：趣旨とねらい（2017年）				
		J-1	J-2	J-3	K-1	L-1
A	大学に対するイメージの変化	○				
B	大学という教育機関の具体的内容等を知る	○				
C	普段の生活では知らないことを知る （知識の拡大）	○				
D	見学・体験内容への興味が増したり、満足感 を得る	○				
E	夏期講習特別企画（大学見学ツアー） に対する満足感・期待感を持つ	○				
F	日々の学習に対する意欲の高まりを感じる					○
G	大学への進学意欲の高まりを感じる			○	○	
H	進路選択の材料が増した			○	○	
I	身の回りの生活への関心が高まった					

表 3-3 感想文から抽出されたカテゴリーと企画実施で見込まれる成果とのマッチング (2018 年)

分類記号	抽出されたカテゴリーの名称	企画実施で見込まれる成果：趣旨とねらい (2018 年)				
		J-1	J-2	J-3	K-1	L-1
A	大学に対するイメージの変化					
B	大学という教育機関の具体的内容等を知る	○				
C	普段の生活では知らないことを知る (知識の拡大)	○				
D	見学・体験内容への興味が増したり、 満足感を得る	○				
E	夏期講習特別企画 (大学見学ツアー) に対する満足感・期待感を持つ					
F	日々の学習に対する意欲の高まりを感じる					
G	大学への進学意欲の高まりを感じる			○	○	
H	進路選択の材料が増した					
I	身の回りの生活への関心が高まった					

表 3-4 感想文から抽出されたカテゴリーと企画実施で見込まれる成果とのマッチング (3 年間全体)

分類記号	抽出されたカテゴリーの名称	企画実施で見込まれる成果：趣旨とねらい (3 年間全体)				
		J-1	J-2	J-3	K-1	L-1
A	大学に対するイメージの変化	○				
B	大学という教育機関の具体的内容等を知る	○				
C	普段の生活では知らないことを知る (知識の拡大)	○				
D	見学・体験内容への興味が増したり、 満足感を得る	○				
E	夏期講習特別企画 (大学見学ツアー) に対する満足感・期待感を持つ	○				
F	日々の学習に対する意欲の高まりを感じる					○
G	大学への進学意欲の高まりを感じる			○	○	
H	進路選択の材料が増した			○	○	
I	身の回りの生活への関心が高まった					

## 考 察

分析Ⅰと分析Ⅱの結果を踏まえると、4 年間に渡って実施してきた東邦大学での学内見学ツアーは、参加した生徒達の学習変容に一定の影響、しかもプラスの影響を与えていることが分かる。これは企画協力者である本学教職課程にとっては、大変に喜ばしいことである。もちろん、参加した生徒達全員が見違えるように変化したということではない。しかし、貧困家庭の子どもたちに対しては、物質的な不足や欠乏に加え、人との交流の機会や経験の不足、教育機会や教育経験の不足が指摘されている。今回の大学見学ツアーが、多少なりとも参加した子どもたちの生活経験の幅を広げ、その質を高めるものになっているのだとしたら、今後も大学として支援を継続してゆくことには大きな意義があるといえる。また、大学見学ツアーの企画の

趣旨についてもかなりの部分が生徒達に理解され、達成されていることも今回の分析結果から確認することが出来た。これは支援するスタッフにとっても非常に勇気づけられる結果である。

ある生徒は、この大学見学ツアーに複数回に渡り参加する中で、大学進学を進路選択の一つとして真剣に考えるようになったと聞く。もちろん大学進学だけが最良の選択だとは必ずしもいえない。しかし、これまで自身では考えることや想像すること自体出来なかった大学への進学という道を、大学見学ツアーでの経験をベースにして、思い描くことが出来るようになったこと自体、大きな進歩であるといつて良い。本学教職課程としても今回の分析結果を踏まえ、子ども達が東邦大学の見学ツアーでしか学べないこと（他では学べないこと）は何かについて、もう一度考えてゆきたい。そして、少しでも多くの生徒が大学への進学を考えてくれる機会となることを願いながら、支援の継続を行ってゆく所存である。

### 謝 辞

本稿の執筆を行うにあたり、受講学生の感想文（生データ）並びに学習支援事業に関わる基礎的なデータ（講師の人数等）は、全てらいふあっぷ習志野のご厚意と了解を得て提供して頂いたものである。特に学習支援管理者の渡辺伽奈氏と講師リーダーの中野佑樹氏には、データの提供時に貴重な示唆と助力を頂いた。御二人の協力なくして、本稿の執筆は出来なかった。本紙面を借りて、厚く御礼を申し上げます。

### 引用文献

厚生労働省 2015 子どもの貧困率 平成 27 年国民生活基礎調査の概況